



パフォーマンス評価を「評価」する

前3月決算から厚生年金基金の資産評価が時価基準になった。これに平仄を合わせるように、日本証券アナリスト協会でもパフォーマンス報告基準の策定作業が進んでいる。

パフォーマンス評価サービスを提供する会社も既に数社ある。その多くでは、リスク調整後のリターンが評価の基準として使われている。実は、こうした定量評価は、データを継続的に入手できる体制が整備されていれば、さほど難しくない。

しかし、この定量評価には問題がある。「実力と運とを区別するには、20年分の月次データが必要」という学者もいる。また、「過去の高いパフォーマンスが将来の成功を必ずしも約束しない」という調査も多い。

従って、表面的な数字だけを鵜呑みにしないで、定性評価も含む色々な分析を加えて、評価サービスを利用する必要があるだろう。格付機関の意見である格付けと同様、評価情報の意味を考えながら使いこなすことが重要なのである。

《目次》

- ・ 公的年金：「ある同窓会での年金談義」(2)
- ・ 年金会計：IAS19(1998年改訂)「従業員給付」(4)
- ・ 年金運用：ミューチュアル・ファンド投資(2) スタイル分析とアセット・アロケーション